

## 第十一章 郷土の伝統行事

### 1. 御木曳き（神前神社の鳥居）

当社（神前神社）鳥居ノ儀ハ、往古ヨリ伊勢ノ国度会郡山田ノ原ニ鎮座、外宮豊受大神宮、御遷宮式執行ノ度毎ニ、古材ヲ拝載シテ鳥居ヲ建ツル旧例存在シ、延喜5年(905)2月吉日神前神社ハ伊勢神宮遷宮毎ニ、外宮一ノ鳥居ヲ神宮ヨリ下賜サレル、伊勢神宮ヨリ賜タル明細棟札ヨリ調ベルト、慶長4年(1600)ヨリ二十回程賜ワル……と古書にある。

明和6己丑年6月吉日(1769) 外宮一之鳥居 (第50回遷宮)

寛政元己酉年8月吉日(1789) 外宮一之鳥居 (第51回遷宮)

⋮

平成6年7月吉日(1994) 外宮御北神門鳥居 (第61回遷宮)

御木曳きは20年に一度行われる伊勢神宮の遷宮の翌年、神宮より拝受した鳥居を神前神社まで氏子総出で運ぶ、高角町最大の盛大な行事で、昭和5年の時は、四日市港まで船で鳥居を運び、稲葉町の築港から木曳き車で神前神社まで曳いているが、その後、昭和29年は尾平町の柳橋（平成15年撤去）、昭和49年と平成6年は、高角橋までトラックで運搬し、それぞれ柳橋・高角橋から御木曳きを行っている。

御木曳きは、西瀬古、中瀬古、下瀬古、子供用の4台で紅白の布で飾った鳥居の御用材を、それぞれ台車に乗せ氏子総出で、御用材の上に乗った音頭さんの木遣り節に合わせて



平成6年の御木曳き



掛け声をかけ、高角町内全体を約半日かけて威勢よく練りまわり、最後に神前神社正面の石段を、台車ごと曳き上げるところで最高潮となる。鳥居の御用材が神社境内に納められると、御木曳きの成功を祝って参詣者と氏子の万歳の大合唱により、境内がわれんばかりの、歓声となる。



神前神社境内

## 2. 雅 樂（神前神社雅楽部 「鳳鳴社」）

雅楽は、奈良時代初期に中国から伝來した楽器を使用した、日本伝統芸能の源流となるもので、千数百年以前から高い文化性を保ちつつ現在まで継承されている。高角では、圓勝寺の第11世住職「専教」が京都本山邦楽部に所属して雅楽を習得され、これを次男の「真教」に伝授し「真教」が明治時代末期に有志者である大森嘉三郎、毛利忠右エ門、田中佐吉、中村才一郎、岡本辰郎らを圓勝寺の本堂に集めて雅楽を教えたのが始まりで、その後、順次世代間を継承して「鳳鳴社」としての楽人グループとして現在まで続いている。「真教」師匠は、その後、彦根の龍泉寺住職として琵琶湖の竹生島で雅楽の指導をしていた。

雅楽は、近隣の寺院の落慶法要、御遠忌法要等において稚児行列と本堂での法



新高角大橋・高角西瀬古橋の渡り初め式

要時に奏楽されており。また、所属の神前神社では毎年春、秋、新嘗祭の大祭と歳旦祭の年4回奏楽している。平成15年11月の新高角大橋・高角西瀬古橋の渡り初め式にも出演している。全員が古式ゆかしい衣装を身にまとい古来からの楽器により、往時の雅と尊厳で華やかな雰囲気を醸しだしている。

樂器には「鳳笙」<sup>ほうしよう</sup> 「簫築」<sup>ひちりき</sup> 「龍笛」<sup>りゆうてき</sup> 「太鼓」<sup>たいこ</sup> 「鉦鼓」<sup>しょうこ</sup> 「鞨鼓」<sup>かつこ</sup> が使用される。奏楽曲目としては、「賀殿」<sup>かでん</sup> 「胡飲酒」<sup>こいんしゅ</sup> 「合歓宴」<sup>ごうかんえん</sup> 「拔頭」<sup>ばとう</sup> 「五常樂」<sup>ごじょうらく</sup> 「乱声」<sup>らんじょう</sup> 「越天樂」<sup>えでんらく</sup> 「陪瀧」<sup>ぱいりょう</sup> 「迦陵頻」<sup>かりょうびん</sup> 「陵王」<sup>りょうおう</sup> 「長慶子」<sup>ちょうけいし</sup> 等がある。

### 3. 獅子舞

椿神社での由来では、聖武天皇の時に疫病がはやり天皇は国の難儀を憂いて「大臣吉備真備に國の天下泰平、五穀豊穰」の祈願を命じられ、これを受け吉備真備は、早々に椿神社にこの旨を依頼したのが始まりと言われている。明治の初期、干害のため田が干しあがり、稻が取れなくなり、旱魃に悩まされた村人が、椿神社より獅子舞を呼び雨乞いを行った。その後、4年に一度（うるう年）椿神社より獅子舞が来るようになったと伝えられている。これが百年以上の古い歴史を持つ、寺方町での獅子舞の元祖と言われている。

秋の実りに感謝する秋の祭礼には、寺方町、高角町では獅子舞保存会によって、自前の獅子舞が神社に奉納されるとともに、氏子の家でも舞わされる。

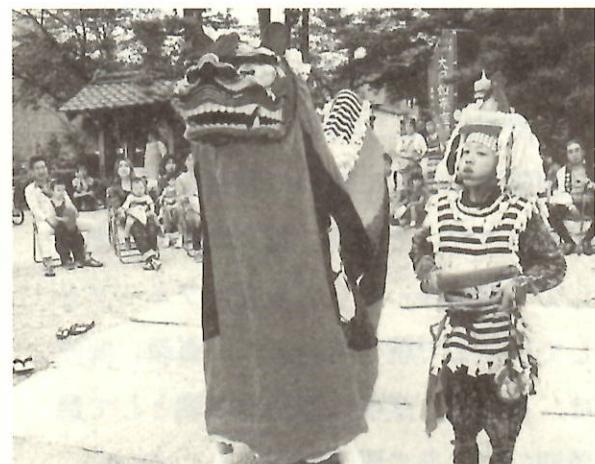
#### 「寺方町の獅子舞」

寺方町に伝承される獅子舞は山本流と言う。山本流の獅子舞は、伊勢の国一の宮椿神社を本拠地とする。鎮座地が鈴鹿市山本町なので地名から山本流と呼ばれている。獅子は、天之宇受女命の化身と言われているので雌獅子である。

獅子舞を行うものを神役と呼び、鉾役、神主、口取り、お頭、後舞、笛、鼓、太鼓の八人であるが、後舞をお頭に含めるので七役と言われている。この中で後舞と口取りは、子供が担当している。寺方町の獅子舞には、①初段の舞、②起こし舞、③扇の舞、④後起こし舞、⑤お湯立ての行、⑥花の舞、⑦子獅子の舞がある。

寺方町の獅子舞の歴史としては、最

初、昭和天皇御大典を記念して当時の青年団が椿神社にて引き継ぎを受け、その後、昭



寺方町の獅子舞

和12年から戦争により中断したが、終戦後（昭和22年）その当時の青年団によって復活された。数年で再度中断し、昭和50年9月に獅子舞保存会を結成し毎年10月の若宮八幡社の大祭に獅子舞が行われる。

### 「高角町の獅子舞」

高角町の獅子舞は、中戸流獅子舞で、この中戸流は、鈴鹿市一宮町の都波岐奈加等神社から出たもので、雄・雌二頭の獅子で舞うのが特色である。



高角町の獅子舞

高角町の獅子舞の舞方としては、①初段の舞、②四方懸りの舞、③起こし舞、④扇の舞、⑤礼の舞、⑥花の舞、⑦門付があり基本的には、雄・雌二頭の獅子と二人の口取りが絡み合って舞う勇壮な獅子舞である。親獅子とは別に子役だけで舞う子獅子があり、

「子獅子の扇の舞」では、子獅子

が観客の間を飛び回り、厄払いの所作として施主の家族や観客の頭や肩を噛み愛嬌を振りまいている。

いつの頃か不明であるが、高角町では初め山本流の獅子舞を受けていたが、その後、中戸流の教えを受け地元で舞わすようになった。当地で中戸流獅子舞を始めたのは、明治時代ではないかと言われている。

戦争で一時中断していたが終戦の翌年（昭和21年）に、当時の青年団が中心となって再開し、最盛期には菰野、四日市旧市街等まで舞を行っている。5年ほど続いたが、再度中断し長期間途絶えていた。その後、昭和50年代に入って高角町として、地元の芸能を保存しようという強い声があがり、昭和55年に獅子舞保存会を結成し、約30年前の獅



子 獅 子



高角町の60年前の獅子舞衆

子舞の経験者が集まって大変苦労して思い出し、後継者に引継いで現在に至っている。

毎年10月の神前神社の秋季大祭（例祭）の日には、獅子舞は、早朝神社で入魂の神事を受け、祝い事などで希望された氏子の家をまわり、最後に神社で舞が奉納される。その後、抜魂の神事が行なわれ、獅子舞の一日がめでたく終わる。

### 「尾平町の獅子舞」

尾平町では、久志神社から伝えられた箕田流の獅子舞が伝えられている。

尾平町に伝わる獅子舞の由来は記録によると、江戸時代後期にあたる安政元年（1854）57歳を迎えていた村山武右衛門翁が、当時欣浄寺本堂の建設委員の一人として彫刻師とも接するうち、大きな刺激を受けて、所持していた一本の太い桐の木の根の部分を礎材として精魂を傾けて一個の獅子頭を彫りあげた。これが現在の尾平町に伝わる獅子頭である。

その武右衛門翁の孫の田中耕と村山栄次郎の両名を中心に、中村組の若者達がその努力を結集して獅子舞を始めることとなった。毎年、神明神社の祭礼が取り行なわれる折

（10月7日）には中村組の若者達は未明に起き、みそぎを行い、古来よりの伝統に従い祭礼儀式前段の行事として、獅子舞の演舞を奉納してきた。

明治29年（1896）三滝川の氾濫による大洪水は、尾平地区に耕地流失という悲惨な災害をもたらし、その復興に明け

暮れたためこの神事を中断。しかし、獅子頭を始め諸装束、付属備品は村山栄次郎の所有する土蔵に保存され無事歳月を経たのである。昭和3年に至り今上天皇（昭和天皇）ご即位の折、ご大典祝賀行事として中村組在住の若者の間に獅子舞復活の儀が起り田中耕・村山栄次郎および中村組の古老などの指導を得て復活した。その折、獅子頭の塗り上げと諸装束、付属備品をすべて一新してご大典を寿ぐ獅子舞を行った。その後、毎年つづけられていたが、昭和12年より戦争拡大のため中断。その後、昭和23年に復活したが段々後継者不足となり、昭和42年より休止となる。現在、獅子頭は各家持ち回りで保存している。

中村組の伝承する舞の順序は、①座付、②起舞、③扇舞、④置扇舞、⑤浮扇舞、⑥畳扇舞である。



尾平町の昔の獅子舞衆

## 「曾井の獅子舞」

曾井町も盛んな時代があったことが記録として残されているが、何時の頃か中止されているのは非常に残念なことである。

### 4. 亥の子

旧暦10月亥の日（現在は11月23日勤労感謝の日）に、その年の収穫を神に感謝して行われる昔ながらの素朴な祭りで、子供を中心とした行事である。

「亥」いのししは、沢山の子供を産むことから、来年の豊作をお願いする行事である。また、今年収穫した穀物を天日乾燥する場所の、地固めをする行事とも言われている。農家の庭先いっぱいに筵を拡げ、穀を干す場所を秋の収穫期間だけ設けるため、地面を固める必要があったためである。

子供たちは、藁と繩や南天、菊などの秋の花を持ち寄り「花みこし」や「花車」と「亥の子」を作る。「亥の子」は、今年収穫した藁を繩で手頃な太さに束ねたもので、地面を叩いた時の音色がいいように、太さ・縛り方などを工夫したものである。夕暮れから「花みこし」や「花車」を中心として各家庭を一軒一軒廻り、亥の子の唄にあわせ「亥の子」を地面へ打ちつける。各家庭では、祝儀、または学用品、菓子などをお礼として子供達に渡すのが慣例で、頂いた祝儀などを子供たちで分けるのも楽しみの一つである。年長者ほど分け前が多いのは昔と変わらない伝統で、この時だけは早く大きくなりたいと願ったものである。



い の こ

### 「亥の子の唄」

「いのこのもちはついてもついてもおれません、もうひとつついたら  
おれすぎた、おまけにこまけにどっこいしょ」 (曾井町、尾平町)

子供たちが唄う元気な亥の子唄が、初冬の夜の町にひびく。また、「いーのこ いのこ、  
いのこの晩に重箱ひろて、あけーてみたらじゅべさんのきんだま」と唄われたものもある。  
このように亥の子の唄は、地域によって文言が異なり、それぞれ各地域固有の唄が伝えら  
れている。



い の こ

[参考文献]	三重県三重郡誌	近畿の民間信仰
	三重県の歴史	四日市市史研究第2号
	四日市市史	三重県の地名
	四日市の部落史	よつかいち歴史文化散歩
	目でみる郷土史 四日市のあゆみ	昭和史
	神前郷土誌	宗国史
	各村 村誌取調書	三重県神社史
	神前郷土見て歩き	式内社調査報告
	いちよう	近畿日本鉄道80年のあゆみ
	三重県地名大辞典	三重県酪農史
	大日本地名辞典	泗水

[編集委員] 森寺 紀夫  
江川 滋  
坂倉 馨  
加藤 武治  
多田 茂  
大戸美千代  
野沢 西禧  
川村 宗幸  
堀田ひさ美  
小島 喜代  
中川 里美  
川村 正  
川森 隆子

[写真提供] 石川 雅己  
門馬 和弘

[協力者] 森 逸郎（羽津郷土史と民族研究会会长）  
和田 勉（元四日市市史編さん室参与）

[表紙] 川村 隆夫（絵・光風会会友）  
田中ゆかり（題字）

(順不同・敬称略)

## 編集後記

冊子作成にあたって、地域の皆様に色々とご協力をいただき、誠に有難うございました。

編集にあたっては、各種資料を参考とし、地域の皆様に昔の生活とか行事などの貴重なお話を聞かせていただき作成しましたが、不慣れな面もあり事実と異なる記載も有ろうかと思いますので、お気付きの点が有りましたらご指摘を頂きますようよろしくお願ひいたします。

# ふるさと 神前

平成17年8月発行

編集者 神前ふるさと冊子編集委員会  
発行者 神前地区社会福祉協議会  
神前地区地域社会づくり推進委員会  
(神前地区市民センター内)  
三重県四日市市高角町2977番地  
電話 (0593) 26-1501  
印刷所 フコク印刷工業有限会社  
三重県四日市市東日野2-8-1  
電話 (0593) 22-2022